

素晴らしい須走を知りたい！

「すばらしい隊」養成講座 第1回講座概要

第1部：座学「富士山と須走を知ろう」

■日時

平成30年9月15日（日）9時～12時

■場所

富士浅間神社 社務所

■講師

松田 香代子 松田民俗研究所 代表

■講義概要

1. 須走という地名について

－「須」とはサラサラな砂状のものという意味。須山と近い。

2. 須走と須山

－須走と須山は他の地域の人から見ると違いがわからない。両方とも富士山登山道口の集落であり、御厨領（静岡県駿東地方）に位置している。

－両地区とも馬で荷を運ぶ事（駄賃稼ぎ）現代の流通業が生業であり、夏山2ヶ月で1年分稼いだといわれていた。

－須走は街道沿いに家並みが連なる宿場町で須山は農村集落という違いがあり、宝永火山では、両地区とも大きな被災があった。須走は早期の復興ができたが、須山では登山道に噴火口ができることもあり、復旧ができず、夏山の仕事ができなくなってしまった。似ているようで全然違う歴史がある。

－御胎内はこの室でコノハナサクヤヒメが子供を産んだと言われている場所である。溶岩洞窟であり、こうもり穴と氷穴、風穴などと同じようなできかたである。富士山信仰で重要なのは人穴である。

3. 須走という集落

－駿河と甲斐と相模の3国の境にあり、軍事的にも重要な拠点だった。

－人とモノの交流が盛んな流通の拠点であり、御厨地方全体にいえることであるが、豊かな民俗行事が多くある文化的な拠点でもある。たとえば、御殿場市や箱根町には通常神主が行う湯立をこの地域だけは獅子が行う湯立神楽が残っている。

－通りに面して町家が並び、近世（幕末）には通りの中央に溝（水路）が掘られていた。ここでは馬が水飲み、旅人の脚を洗ったと推測される。明治になり、馬車鉄道を通すため溝を道の両側に移設している。通りの中央に水路をつくる形式は、五街道のうちの北国街道海野宿でも見られる。

－山梨県上吉田の御師町では道の両側の屋敷の中に水路が通っており、須走と吉田の町は大きく違う。

－上吉田では御師の家を中心に構成され、御師の家には修驗者が使う「タツミチ」があり、門が構えられている。

－町一番の災害は大火であり、1つの火災が町全体に広がる。そのため火切地とよぶ防火設備が上・中・下と町を区分し、「へた」という防火林が植えられていた。

－須走の家並みの間口は5～6間有り、大きな宿場の間口と同等の大きさで、町としての機能が充実していた。須走の通りは東海道などと比べても広い。この広い通りに運搬用の馬や人でひしめいていた。



4. 須走口の廃仏稀釈運動

－明治の廃仏稀釈運動により、明治 8 年(1875 年)薬師ヶ岳が久須志岳に変えられ、須走の寺院はすべて廃寺となった。西寿院は本寺の御殿場市東田中宝持院に、香積寺と永昌寺は本寺の同市深澤大雲院に引き継がれた。富士市内の仏像の多くが噴火口に埋められたりした。香積寺にあった千体阿弥陀堂の阿弥陀如来像も床下に長らく修められていたが、大雲院の住職がきれいにし当寺の位牌堂に祀つてある。

－野中大日堂はお籠りの修行をした場所であったが、周辺の村々では日和乞いの護摩焚きをする場所でもあった。明治以降は野中神社となった。富士登拝のための禊場所の不動の滝は、国道 138 号バイパス道路の整備で無くなつた。

－明治 19 年(1886 年)浅間神社は県社となった。

5. 富士山と登山口

－寛延 2 年(1749 年)に御師は 17 名に固定されたが、吉田口とは御師の形態が異なる。御師は宿坊経営と檀家廻りが重要であるが、須走の場合檀家廻りを主としていた。須走御師 17 名は交通機関の発達により多くの人が訪れるようになると旅館業に転業した。

－富士吉田の御師は檀家廻りや宿坊経営が主な収入源である。屋敷にご神前という祭壇を設けて、お札や幣束を制作した。檀那場の導者を迎えるときには 1 日 100 人以上休泊・案内の世話をした。夏山が終ると檀家廻りをして祈祷し、米で報酬を受けた。

－吉田は宿坊経営に力を入れ、須走は檀家回りに力をいれていた。

6. その他の富士山登山道口集落

－江戸時代、富士山の登山口は 6 つあり、それぞれ海拔が異なつた。吉田は海拔 860m、富士講中心の登山口である。須山は海拔 660m、村山は海拔 560m、大宮は海拔 180m、河口は海拔 860m である。登山口によって富士山信仰のすがたはさまざまである。

－河口浅間神社は「あさま神社」と呼ぶ。一般的に火山のことを浅間（あさま）と称した。

7. 交通機関の発達 須走の変化

－明治 22 年(1889) 東海道線御殿場駅開業、明治 32 年(1899) 新橋・須走間馬車鉄道開通、明治 34 年(1901) 須走・籠坂峠間馬車鉄道延長。これにより、富士吉田・籠坂間馬車鉄道と連携した。

－御殿場駅→(馬車鉄道)→須走口となつたが、明治 36 年(1903) 中央線開通により、籠坂峠を越えなくても中央線で物資を運べるようになった。

－須走口には鉄道をはじめ交通機関が発達したことから、探鳥会をはじめ夏山登山者が増えた。

8. 須走口登山の特徴(富士山東口旅館チラシによる)

①「清めの滝」の拝所、②浅間神社(富士東本宮)、③精進川を経て一里松、④馬返・2、3 の茅店・一の鳥居、⑤かりやす(茶店、銘酒白酒)、⑥雲切の社(一の末社)、⑦中宮御室神社、⑧昼食場
⑨古御岳の神社、⑩本山(一合) これ以上は石室、⑪四合五勺に御胎内、⑫五合目・五合五勺…中廻練路(御中道)、⑬六合：下山路の分岐、砂払いへ、⑭八合：甲駿の国境、両道を合せて登攀、⑮九合：向薬師、頂上まで胸突、⑯頂上：北に薬師の社、南に鳥居、⑰この間に須走村の出張室 12 軒と石柱

－首都圏から交通の便が良かった。

－夏稼ぎの分業体制として、①馬方：荷揚げ専門とノリウマ(乗馬)用、②強力：荷揚げ・登山案内、③番頭：宿や山室の仕事の分業、④支度所・土産物屋・娯楽施設など、⑤番頭小屋(宮上)での待機、⑥山小屋のサシ(札差)による宿への勧誘や登山バス乗り場での客引き

－御師は社会的地位が高い（大申学）。富士山の名物は白酒などをPRしている。

－大正5年（1916年）には馬返まで乗馬での登山が可能となり、昭和34年（1956年）、バスが吉御嶽神社まで開通し、バスの終点を新五合目とした。

9. 富士山噴火の歴史と須走

－宝永噴火 1707年11月23日（新暦12月16日）噴火口3つできた。

－宝永噴火による被害はおもに山麓の東側で、家屋の倒壊・火災。火山灰が酒匂川に流れ込んで河床が上昇したことにより小田原平野に洪水が起きたが、幕府直営の普請が行われた。須走は他の村に比べて復興が早かった（早くさせた）。

－宝永噴火の予兆の言い伝え…小動物が下りてきた

第2部：トーク「富士山と須走を知ろう」

■講師

関谷 葉子 御厨おもてなし俱楽部 代表

松田 香代子 松田民俗研究所 代表

■講義概要

Q. 御師ってなんでしょうか？

A. 御師＝御祈祷師

Q. 御師の家並みの両側にある水路は禊用ではないのか？

A. みそぎではない。禊は不動の滝で。防火、洗い物、風呂水、「どんどん」と呼ぶ貯水施設を作って、野菜を冷やすなど生活用に使われていた（生活用水）

Q. 一番位の高い浅間神社は？

A. 富士宮の浅間大社（国幣）、静岡の浅間神社（国幣）。浅間神社は噴火を鎮めるために建立

Q. 棕櫚（しゅろ）紋とはどのような紋なのか

A. 天狗が持つ羽団扇のような棕櫚の葉紋、大宮：16枚、静岡：16枚と決まっている。

Q. 須走村の屋号が出来たのはいつ？

A. 吉田御師の屋号「坊」は宿坊（お寺の宿）を意味する。江戸時代、須走には坊はなかった。

須走で屋号を持つ大きな家は、米、塩を扱う問屋だった。

須山の御師は屋号がなく名前で呼んでいた。

Q. 間口、曲がりとは何か

A. 建物の規模、曲とは屋敷の大きさ。須走は水に苦労した（井戸を掘りあてるのが大変）。雪代で夏山は道が変わる。山小屋はもともと御師が持っていたが、気候の激しい富士山では夏山の前に道や山小屋を修復したので、吉田では本業が大工の方もいる。富士山は信仰の山なので、江戸時代は女人禁制であり、馬も馬返しまでだった。近代以降（幕末）は女性もOK。食行身禄派の富士講は女性に開放的だった。

Q. 防災面での対策を教えてください

A. 須走の集落は、雪代（ゆきしろ、融雪時の土石流）の被害にあわない。

→三国山系の佐野川（須走では精進川）は富士山の雪代が流れてこない。

しかし、富士登山道での雪代被害は頻発している。

Q. 富士山の「富」は、ワカンむり、ウakanむりどちらが良い字？

A. 両方良い

Q. 戦国時代はどこの領？

A. 時代によって領が変わった。武田が治めていた時期あり

Q. 富士山は女性の神なのに女人禁制なの？

A. 靈山の多くが女人禁制。富士山の神は美人が嫌い。伊豆には姉神のイワナガを祀っている浅間神社もある。富士山の信仰登拝は2ヶ月と限られていた。

富士尊者が巡った道の検証は今始まったところ。竹ノ下と須走の御師は親戚関係にある。竹ノ下から下りてきて須走の御師の家に泊まった。